

フランスにおける一部の話しことば (アルゴを含む)
辞書について

渡 辺 捨 男

Sur les dictionnaires de la langue parlée et de l'argot

par

Suteo WATANABE

最近、関西の某大学で、幾人かの仏文の研究者が協力しあって、フランスのある作家 (R. Queneau) の小説に現われる難解な語を摘出して、その語義を解釈した用語辞典 (le lexique) をつくってこれを発刊しようとしているのである。シェクスピアや、モリエールのような数百年前の作家ならともかく、ひとりの現代作家の用語辞典をつくるのはきわめて珍しいことであろうし、見方によっては不審なことである。しかし、何故こういうことになったかを立ち入って考えると、それには理由がある。

① R. Queneau は現在の仏文壇における人気作家のひとりであるが、文体に特殊の執念をもち、アルゴを駆使し、また、民衆語を数多く用いるので、ときにはなはだ難解である。

② これら「アルゴ」(l'argot) (その意義は別に説明する) と、民衆語 (le langage populaire) (別に説明する) とを加えた「話しことば」の領域は、あたかも、米国の「スラング」に相当すると思われるが、英米とちがって、フランスの出版界では、これまで、これらの領域のことばを、ひろく、体系的に、総合的に収録して解説しようとして試みられたことがなかった。

③ 従って、別に述べるように、これら一部の話しことばにつき何冊かの小辞典を用いて、重複を忍びつつ、非能率的な解説を個別に進めるより、数人の協力が得られる限り、まず共通の難解の用語を摘出解釈し、でき上ったものでこれを解説した方が、能率的とも考えられる。Queneau は寡作で、彼の小説は全部で10冊程度であるから仕事がしやすいということもある。

以上の理由によって、Queneau のみの用語辞典を、本邦の同好の研究者たちがつくろうとする一見奇異な努力もわからぬでもない。迂遠といえはたしかに迂遠であるが、そうした不都合は、いわば端を仏本国に発しているのである。

ここで、おおまかな言いかたをさせてもらおうと、ふつう、小説には、「書きことば」中心のものと、「話しことば」中心のものがあるといえる。

もとより大体の傾向としてはあるが、技術的にいうと、「書きことば」を尊び、「地の文」に主眼をおいて、会話はむしろ少なく、これを挿入する場合も「間接話法」を多く用いて、要約して主旨を伝えるにとどめようとするいきかたをとる小説があり、これに対して「書きことば」を偏重せず、会話を重視して、対話には、多く「直接話法」を用いて、対話をそのまま再現しつつ話を運ぶといういきかたをとる小説があることは周知のとおりである。上にいった Queneau は独特のうつくしい「地の文」をあやつるけれども、大体の傾向としては勿論このあとの方の系列に属する作家であり、彼のほかこの系列に属し、アルゴや民衆語をまじえたり

して「話しことば」偏向のとくにつよい作家もかなり多数にのぼる。

たとえば L. F. Céline もその代表的なひとりで、特異な才能を高く評価されている作家であるが、彼の場合は下層の話しことばと「地の文」が等質に、ときに交錯するところに特徴がある。そのほか、現在では、やや人気の一部に偏した感じだが George Simenon もそうである。また、少し古くなるが、Francis Carco もこの系列に属する作家であることはいうまでもない。

さて、これらの作家の小説を読んでゆこうとすれば、いきおい、上に述べた正統な「書きことば」中心の作家を読むばあいと別個の努力が要請され、その手段として、「書きことば」以外の民衆語またはアルゴ中心の、内容豊富な辞書を必要とする。付言するが、第二次大戦後、フランスの出版界はかなりアメリカナイズされた部面があり、「書きことば」中心の小説その他の出版物より、もっと大衆化した「話しことば」中心、やや砕けた、俗化したことばを中心とする出版物が、文学としての「質」はともかく、「数」は増加しているようだ。

そうして、これらを読んでゆくには、フランスで既に刊行されている辞典その他の手段ではいかにも不十分なのである。では、どう不十分なのかということになるが、その前に、ここにいう「アルゴ」および「民衆語」の意義を簡単に述べておく。

ことばを「書きことば」と「話しことば」に分ける。この「話しことば」にもいろいろの段階があることは周知のとおりであって、公式の、堅い「話しことば」が上限に位し、次第にそれが砕けた、やや俗なものになってきて（民衆語 *le langage populaire*）、ついには一般人にはわからないような「アルゴ」(*l'argot*) におち込んでくる。そしてこの中位以下に属する「話しことば」が、さきに行った民衆語とアルゴを加えたものなのである。

「民衆語」とは Henri Bauche が用いた語であるが、要するに「話しことば」の中層以下に属することばで、「アルゴ」以外のもの (Henri Bauche : *Le langage populaire* p. 23) を意味する。私はいまこの「民衆語」という語を借りたが、これにはほかにも呼び方があり、その範囲も漠としているが、実はそれでかまわないのである。何となれば、ここで対象とするのは民衆語にアルゴを加えたことば、すなわち、話しことばのほぼ中層以下のすべてのことばであるというくらいの定義で必要かつ十分だからである。

次に、「アルゴ」(*l'argot*) について述べる。フランスでいうアルゴとは、「話しことば」の最下端に位することばであるが、もっぱら特殊の環境 (*le milieu*)、特異の社会、に用いられることば、たとえば犯罪社会、ヤクザ、またはそれに準ずる世界、または合法的であっても限られた職業に従う人々（たとえば軍隊とか、ある地域内のある種の行商人の世界）のあいだにのみ用いられ、原則としてその枠内でのみ発達したことばを意味する。その特徴は、邦語でいう「隠語」的などころにあり、外界から一応切離されたその社会、その環境に属する人々だけに通用すれば足りることば、つまり「素人衆」にはわからぬ、またわかって貰っては困ることばなのである。少なくとも「発生」的にはさうなのだ。しかし、いかなる特殊社会にも一般社会との交流はあるわけであるから、そうしたことばも時がたつにつれて、外部の人でありながらその環境に若干のつながりをもつか（たとえば顧客）、またなんらかの興味をもつ人々はその意味を理解するようになり、それらのことばのもつ「特異の香気」「秘密の風」を面白がって、次第に真似て使うようになって、それをを用いる度数もふえてくる。こうして、アルゴの一部は全くの一般人にも普通のことばになってしまうのである。言語現象としては、このことが面白いのであって、そういう事情あるがゆえに、たとえばパリの下町などで、もともと隠語的

に各界に属していたアルゴが、次第に一般語にもぐり込んできて、そのさい本来の隠語的性格を一部喪失するようになる。

ところで、これらが文学の世界へ移入されるさいは、上に述べた「書きことば」中心の作風の作家はもとよりこれを放てきする。ただ「話しことば」中心の作家のみが、「直接話法」の部分へ、ためらい勝ちにこれを持込んでくる。作家によっては、そのアルゴによる会話の部分が次第に多くなり、ついには会話には勿論「地の文」にもアルゴを用い、はなはだしいときは普通のことばの一行がほとんどアルゴのみの一行におきかえられるといったことさえおこる。これは文学の本質から見て、たしかに行きすぎの技法と思えるが、とにかくこうなると、アルゴの意義はもとより、アルゴの特殊文法、または一般語のアルゴとしての特殊発音など（従って内容的には別の語になっている）を理解せずしては、その小説は理解できないということがおこるのである。

しかし、ここに注意を要するのは、

④ アルゴに類することばはどこにもある。英米のばあい、特に米国のばあい、例の暗黒社会（underworld）のことばが広汎に存在することは周知のとおりである。だが、北米では一般にスラング（slang）と呼ばれることばが、現在、あまりに広汎かつ強力に行なわれているので、一般的なスラングも、暗黒社会の特殊語も、分類としてはすべてスラングという名で呼ばれ、それらの総和がスラングであると解され、それで何ら不都合がないのである。従ってそのうちで、アルゴ的なものをとくに抽出し分類することは可能であっても不必要である。

⑤ フランスの場合は、以前から、さきいった隠語的性格を帯びるアルゴを、その性格のままに、「ことば」の立場からは、一般語と切離して維持してゆくことに關心をもつ傾向がある（上述「一般化」の事象があるに拘らず——）。（参照。「一般の民衆語はアルゴと本質を異にする」。Henri Bauche, *ibid* p. 23）この傾向、そしてそれに則して辞書までアルゴのみの隠語趣味の辞書が続出することがフランス流なのであるが、この辞書が小冊子のみの累積であるという事情は、話しことばに則した文学と対決しようとする者にとって、後に述べるとおり大きな支障になっている。

それで、この辞書のあり方を、アメリカと比べて説示したいのであるが、そのまえに、さきいった、砕けた「話しことば」中心の作家たちと、戦後アメリカ文学のフランスへの浸透、ひいては現在のこれら中層以下の話しことばの解読のあり方について一言する。

これらの作家たちについてはまず代表的な L. F. Céline と R. Queneau をあげたい。

⑥ Louis Ferdinand Céline (1894—1961)

下層下級のことば、アルゴ、何でも喚きちらし、ときに乱心と評された特異の作風のひとである。こうした下層の「話しことば」を小説の「地の文」にまきちらし、正規の文法を無視して、わざと「話法文法」を用いる。内容的にも普通はタブーになっていることをこともなげに言いちらし、学術語やインテリ用語、医語が飛び出すかと思えば、下層の民衆語やアルゴも放胆に叩きつけられ、まるでそれは嘔吐しているような感じを与える。こうした技法の効果は、どぎつく、鮮烈、ときにはきたならしいけれども、作家が対象を直視する裸眼をもち、かつ作家の思索の「切れ」がいいときは独特のはげしさ、手強さの印象を与えることは否みがたい。もとよりこういう作風は、一部の人々にはあくまで嫌悪されたが、彼の初期の作品の優秀さは一般に認められ、批評界の気むづかしいフランスにあって、その《Voyage au bout de la nuit. 1932》は「どぶ泥文学」と評されつつも、ゴンクール賞を受ける寸前までいった。彼の

文学の大きな特徴は、下層の「話しことば」の世界、そのもつ特異の魅力の領域へ文学を引きづり込んだことにある。

⑥ Raymond Queneau (1903—)

前に述べた作家であるが、文体にはとくに執念をもち、ことばのあつかいには、小説と詩ともに、ながい間きびしい習練をつづけており、ある批評家はこれを「ことばへの賭」と呼んでいる。彼の小説のあつかう内容は、パリの小市民のいわば無色の生活にほぼ限られ、アルゴや民衆語がピチピチと飛出し、新鮮な印象をあたえる。彼のばあい、そうしたアルゴや民衆語をちりばめるのに文体上特別の工夫がほどこされており、発声の面からも民衆の「いきぶき」を文字の世界に再現してみせる。(これはとくに最近の小説で多く試みられている)。一般的ではないが人気のある作家である。なお、彼の描いて見せる厚みのない人物群と「無色」の世界は、批評家によっては実存主義の「無意味」の世界と通ずるともいわれる (Pierre Brodin ; *Présences contemporaines*, I. p. 345)。とにかくはなはだしい卑俗に陥らずに、しかもかなり下層の「話しことば」の世界へ文学を引きづり込み、そこに別の乾坤を建立した作家である。

次に、前に述べたフランスにおけるアメリカニズムにつき一言する。第二次大戦直後 (1940年代) アメリカ文学の翻訳がフランスを席捲した時期があったが、そのときの立役者は Dos Passos であり、Faulkner であった (Pierre Brodin, *ibid* III. p. 256)。この時代はフランス伝来の「心理描写」が影をひそめた時代であり、(「分析の精神は役目を終ってもう死んだ」 J. P. Sartre, *Situation II*)、説明のない、なまの事実を叩きつける文学の時代であって、そのときの、そうした傾向をもつ米文学のフランスへの浸透は想像以上に烈しかったようである。一国の文学がこうした時代を経たということ。またはその影響を、今になって、過大に評価することは慎むべきだが、この過程よりして、フランスの文学が、かつて精緻をほこった心理小説から、なまの事実を打ちつける文学、粗暴で非情な行動中心の文学への推移を通じ、やや下層の「話しことば」中心の文学へ俗化 (ここでは Queneau などとちがって価値的には下位の) の途をたどった事実は、ひとつの傾向としては、目を掩ふべくもない。なお、アメリカの戦中、戦後にあらわれた廉価ポケット・ブックの氾濫の傾向は、いまフランスにもおよび、かつて見なかった小型本 (古典のようなものより、書き下しのものが多く、かつそれがここで問題なのであるが) の氾濫となってあらわれ、そういう形において、やや下層の「話しことば」中心の文学への俗化が行なわれていると認められる (現在はもちろん、将来を少しく予測しても)。ただし、この中には正統の文学といえない部面も多いので、ひとつの傾向として述べるにとどめておく。

さて、以上述べた背景のもとに、こうした作家群と対決してゆこうとすると、何度もいうが中層以下の話しことばやアルゴを理解するためにそれ相応の手段がある。その手段はいろいろあるが一番端的なのは辞書類であろう。

フランスには「リトレ」(Littré) をはじめすぐれた、大部の辞書が相当にある。これらの辞書が、上に述べたやや砕けたことばや、アルゴ類をすべて網羅して解説してくれていれば問題はないのであって、こんな小文を草する理由はまったくくない。ところが実際は反対で、これらの大辞典はまずほとんどそれらの民衆語やアルゴを、やや意識的に締め出していることが多い (これには、いささか理由もあるが、ここでは述べない。) わずかに、Robert と称する大辞書 (現在刊行中で、「R」の半ばまで終わっている) が、やや民衆語を集録しており、ときに適確な説明を加えている個所もあるが、私の気づいた範囲では、どうも選語が網羅的というのに程遠

いようであり、勿論アルゴはほとんど収録されていない。それに「R」以下は未刊行だからどうにも使いようのないところがある。結論として、一般の辞書類では、やや下層の話しことばの解明を求めるのは絶望であるといわねばならぬ。（書きことばと中層以上の話しことばに対しては上に述べた大辞書がほとんど完璧の解明を与えていることはいうまでもない）。そこで助け舟として現われるのが前にかかげた **Bauche** の「民衆語」(**Le langage populaire**) という本である。これはアカデミー・フランセーズ (**L'Académie française**) 受賞本で、解説は「民衆語」と一部のアルゴの両者にわたっており、誰もが恩恵をこうむっている良書である。ただ惜しいことに、この本は本文の理論の部分に比べ、辞典の部があまりに少ないこと（本文160頁に対し、辞典の部が66頁にすぎない）と、どうしたことか、古い本なのに（初版1920年）こういう辞書には欠くことのできない「増補」がほとんど行なわれていない。従って、筋はひじょうに良い本なのだが、基本的なものにしか役立たないのである。

このほか、多少の熟語的な表現の解説書はあるが、小冊子であまり役に立たない。

こうして、民衆語だけについても、埋めがたい大きな空隙 (**lacune**) を残しているが、こんどはアルゴだけの辞書を眺めてみよう。屢々いのように、フランス人、とくにその都会人はアルゴをアルゴとして愛する。アメリカ人の「暗黒社会のことば」(**Slang of underworld**) は実践的であるが、フランス人のそれに対応するアルゴは隠語的であるといった人があるが、その通りであろう。そのくせ、特殊社会の周辺近くにいる人々はやや誇らしげにアルゴを使用する傾向がかなり強く、長い間には実はアルゴの一部はかなり一般語化してゆくことは前に述べたとおりである。ところが、辞書となると、こうした傾向はまったく無視され、アルゴはアルゴだけの小冊子のみの辞書しか刊行されていないようである。これらの辞書には、本邦でいう、いわゆる「赤本」めいた小冊子が多く、比較的まじめなもの、また学術的なものもないではないが、共通していえることはそれらがすべてあまりにも小冊子にすぎるということである。いま、私の手許に、アルゴの辞書類が7冊あるが、四六刊で300頁を超えるものは1冊もない。（これらの書名はいま列挙しない。ただ、**Géo Sandry : Dictionnaire de l'argot moderne 1953 [3ème édition]**）というのはやや良書である。ただし小冊子にすぎるとし、活字やスペースも大きすぎ、従って内容が少ない。試みに、これを英米のこうした辞書とくらべると、そこに大きな格差がある。英語のばあい、民衆語プラス「アルゴ」、すなわち「スラング」の辞書としては、著名な **Eric Partridge : A Dictionary of Slang and unconventional English** という大辞書がある。これは大版で、二段組み、活字は小さく、頁数は1230頁ある。その内容の網羅的なこと、フランスのアルゴ辞書と比べものにならないことは一目でわかる。

いまわれわれが、フランスの「話しことば」に偏した作家をていねいに読まうとすると、以上7, 8冊の小辞典に一々当たってゆかねばならぬ。Aの辞書になかったものがBの辞書にあるかも知れぬ、といった具合である。しかも第一義的な共通的なアルゴはどの辞書にも載っているからそれだけの辞書も、不必要なものにスペースを割いているわけで、唯さえ少ない語数がなおさら減るわけである。その結果として、第一義的なアルゴはどの辞書にもあるが、ちと難かしいアルゴはどの辞書にもないというばかばかしいことがおこるのである。1, 2冊の網羅的な大辞典があれば、そうした無駄は一切なくなるわけなのに、こうした辞典の刊行はまったく行なわれていないのである。

さて、以上は **Alphabet** 式の辞書なのであるが、アメリカには、このほかにきわめて能率的な、体系化されたスラングの辞書がある。これはいわば「事項別」のスラング辞書というべ

きもので、たとえば、いろいろの体系に分けられてはいるが、いま「酒飲み」という項目を開いてみると、わずかのスペースに、なんと150ばかりの「酒飲み」を意味するスラングが並んでいる。また「いかれている、狂っている」という項目には、250ばかりその意味のスラングが目白押しに並んでいるといった風である。読書のさい、何かそれらしいと思われる意義までは漕ぎつけられることが多いのであるが、そこまで来たとき、この辞書の該当の項目をひらき、そこにその原語を見出しさえすれば、立ちどころに意義が確定し、疑問は氷解する。すこぶる便利である。この本は *Berry and Van Den Bark : American Thesaurus of Slang, 1954* といい、私が幾年か前にしばらくこの方面のことをしらべたとき実に大きな恩恵をうけた。注意しておくが、この本はスラングの同義語 (synonyme) 辞典ではない。およそ人生一般、人の精神活動、肉体活動のすべてが、事項別に分類され、体系化され、それがすべて一般語ならぬスラングで示されている点が特徴なのである。なお、この本は細字で本文のみ900頁、ほかに索引350頁が付けられている大型本で、Slang についてはほとんど網羅的といえ、これの使用に慣れると前に掲げた Partridge の大辞典などほとんどいらなくらいである。

かく見てくると、現在のフランス辞書界でいちばん遺憾なことは、これら民衆語とアルゴを、

① 網羅的にとりあげることすこぶる消極的であること。

② とくに「事項別」にこれら領域のことばを、体系的にとりまとめる努力がまったく欠除していること。

にあると思われる。

結論としてこの①②の方面の辞書づくりはぜひやってほしいのである。

締めくくりとして最後にいう。上に述べた①についてはさきにいったとおり、まづ1冊の網羅的な大辞典をつくるのが先決である。新規にとりかかっても勿論よいが、前に掲げた *Bauche* の辞典の部を数倍に増補するのも一つの方法と思われる。内容としては、*Bauche* もそうなのだが、アルゴと下層の話しことばの両者にわたることが望ましい (Alphabet順)。

②については、アメリカの辞書をそのまま真似る要はむろんないが、体系的に「事項別」にそして頻度の少ないアルゴも加え、網羅的であることを要する。網羅的ということはこの種の本の死命を制するもので、説明よりも理論よりも多数をたつとぶ。

以上のような辞書づくりは、他の国ではとてもできないけれども、フランス本国ではさほどの難事ではないはずで、いままでの分散していた努力を協力のすがたにもち込むだけで足りるともいえそうである。またそれだけの実力を備えた語学者および関係者に恵まれていることも疑のないところである。